

nanako-fifteen

II

第一章

僕たちは  
前世から赤い糸で  
つながっている

a.minemura

## nanako-fifteen II

登場人物

prologue

1・僕たちは前世から赤い糸でつながっている

017.

018.

019.

020.

021.

022.

023.

024.

025.

026.

027.

028.

029.

030.

あとがき

奥付

## 登場人物

間宮 ひろ	高校二年生 陸上部で活動中のスポーツ少女
桧山 健	大学生 ひろと同じマンションの住人
新城 富夢（とむ）	(株)新城不動産の社長でマンションのオーナー
新城 なおみ	新城不動産の専務 社長夫人
権田 トオル	高校生 柔道部と華道部の両方に籍を置いている
河合 ヤスオ	高校生 陸上部のマネージャー
河合マスター	ヤスオの父 お好み焼き屋「かわい亭」の店主
間宮宮司	ひろの父 神社の宮司
ななこ	記憶喪失の幽霊

## prologue

「コクる……コクらない……コクる……コクらない……コクる……コクらない……コクる……コクらない……」

マーガレットの白い花びらを一枚一枚そおとちぎり、五本試して五本すべての結果が「コクる」で、彼は大きく息をついた。深呼吸を何度も繰り返し、すっと立ちあがり、初夏の晴れた空を見上げる。

「よおし！ チクるぞ！ いや、コクるぞ！！」

\*

一階の新城不動産事務所兼管理人事務所から五階の自室へ上ろうとして、エレベーターに駆け込むと、先客がひとりいた。

体格のいい、学生らしい男、高校生か大学生かはわからないが、そんなことはどうでもいい。そもそもこのマンションはほとんどの住人は学生で、彼らの友人もまた学生。住人と出入りする友人の顔など、覚えきれぬものじゃあないし、わざわざ男の顔なんて見たくもない。

桧山 健はボールペンを持ったままの手で⑤のボタンを押し、ほかに誰も乗って来ないのを確かめてから扉を閉めた。エレベーターが動き始めてから、⑥のボタンが明るくなっているのに気づいた。ということは、この同乗者は六階まで行くということで……

六階は最上階で、そこにはマンション管理人の新城夫妻と彼らの姪っ子しか住んでいない。管理人夫妻は今、一階の事務所にいるし、高校生の姪っ子は午後二時半は授業中……つまり、六階には誰もいないはずなのだ。

ふと見れば、男は小ぶりの紙袋をさげている。薄い色の袋のなかに、真っ赤な色が見えた。花だ。真っ赤なバラの花が一輪。それと、手紙らしい封筒。

(ふうん?)

なぜか心がざわつくのを感じたが、エレベーターは五階に達し、扉が開いた。

(間宮 ひろのお客か?)

松山の背後で扉は閉まり、学生らしい男を乗せて六階へあがって行った。

(ま、どうでもいいけど)

新城社長から用事を二つ三つ頼まれて、出かけなきゃならない。運転免許証と財布を取りに部屋へもどり、すぐにとって返すと、エレベーターはまだ六階にいた。

\*

《僕たちは前世から赤い糸でつながっている。

愛する間宮 ひろへ

権田 トオル》

真っ赤なバラに添えられた手紙には、そう書かれていた。

## 1・僕たちは前世から赤い糸でつながっている

017.

助手席のあたりで携帯電話が鳴っている。

ワンボックスカーのトランクルームに頭を突っ込んでなにやら探していた桧山は、物色の手を引っ込めようとしてダンボール箱の角にシャツの袖を引っ掛け、ぐっと引っ張られ、思わず舌打ちした。

電話は執拗になり続けている。このしつこさは社長だな、と考え、引っかかった袖をはずしながらため息をついた。

ようやく助手席にもぐり込み、携帯を引っ張り出すと相手はもうしゃべっていた。というより、別の電話でしゃべりながら桧山を呼んでいたのだった。

「あー、桧山ちゃん？ 頼んだ用事済んだ？ 今どこ？ 桜木町？ ちょうどいいや！

なにがって実はねえ、ひろを迎えに行ってやる約束してたんだよ。あれの自転車がパンクしちゃまったんで修理に出してあるんだ。

それがボク、今日、商工会の会合があるの、すっかり忘れててさあ、代わりに桧山ちゃん、迎え頼むよ」

「オレ、工作中なんですけど」

「だからいいじゃん。社長が許可してんだから。仕事の合間にちょっと頼むよ。桜木町からなら、学校まで十分もかかんない」

「え、いや、その、会社のネーム入りのワンボックスに乗って来ちゃったしですね、女の子迎えに行くのにそれはちょっと……」

「いいじゃんいいじゃん、判りやすくてさ。ボクも迎えに行く時はいつもそれだもん。むこうで勝手に見つけてくれるから探す手間が省けるのよ、じゃそういうことで」

「えー！？ もしもし！！ それ、別手当てでしょうね！？」

「……バカ言ってんじゃないよ。ついでだよ、ついで！ じゃ、頼んだよ！ よろしく！」

「あ……待って……ハゲおやじ……」

「……え？ なんか言った？ 空耳かな？ ボクもう出かけるから。よろしくね」

「……………」

　　桧山は慫然として携帯電話を助手席に放り投げた。

　　大学の三年生になった桧山がこの春から一室を借りている新城マンションの大家で、株式会社新城不動産の新城社長は小柄で少々太り気味で頭髪はかなり薄い。

　　その外見からどうしても老けて見られるが、富夢(とむ)という小じゃれた名前からして外見ほど老けてるわけではない。まだ三十代の中頃といったところだ。社長夫人のなおみはすらりとした上品な美人で新城不動産の専務取締役でもある。

　　マンションビルにはカフェと花屋が入居していて、どちらも春先からアルバイトを募集していたのだが、(カフェも花屋もガラじゃない)(不特定の客が来る店はちょっと)(しかし同じビルの中でのバイトは魅力的だな)(わざわざ外へ出なくて済む)、などと思っていたところへ、ビルの持ち主が不動産会社を経営してるのを知って、学業の合間に仕事を手伝わせてくれるよう、桧山は頼み込んだ。三人いた社員のひとりが辞めたばかりだったので、桧山の申し出は快く受け入れられた。

　　ひろ、というのは、同じマンションの最上階、社長夫婦と同じ階の一室に住んでいる高校生。彼女の父が新城社長の伯父にあたるのだという。とにかく親戚関係にあるらしい。

　　陸上をやってるせいで見事に日焼けした手足がいかに健康的な少女だ。ついでに顔も日焼けしていて、いい色つやをしている。

　　自転車で二十分といえはけっこうな距離だが、よほどの悪天候でない限り、愛車をとばして通学している。「トレーニングにもなるし、気持ちいいのよ。日焼け？ 冬になれば治るわよ」と屈託がなかった。

ブラスバンド部のトロンボーンチューニング音がどこからか流れてくる校庭の隅の木陰で、ヒマな男子学生たちが運動部の練習をながめつつ、女子の品定めに余念のない、どこにでもある放課後の光景。

「おおっ、間宮のやつが走ってる！！」

「あいつさあ、いい足してるよなー。あの締まったふくらはぎ……ぎゅっと細い足首……い～よなあ～……」

「おお～、そそられるよなあ～」

「あの足で蹴られてもいいわ～」

「間宮、なあ。マスクはわるくねえが、いかんせん、色気が足らんのが欠点だな。おれはテニス部の吉沢の方がいいや」

「吉沢あ～？ ありやあ、お色気過剰すぎらあ。いまどき流行んねえって」

「それよか、聞いたかよ？ A組の権田の野郎が間宮に告白したんだと」

おおおっという歓声。

「で？ で？」

「にっこりとひとこと。『ごめんね』、だとさ」

「う～ん……まあ……だよなあ」

「ゴンちゃん、ショックでさあ、『湖に身を投げて死んでしまいたい』って、えらい落ち込みよう」

「かわいそうなゴンちゃん」

「おめえが泣くなっつーの」

「巴投げでぶん投げられたってびんぴんしてるやつだぜ。湖に叩きこまれたってどうもなりやしねえって」

「けどさあ、家業の花屋継いで、早いところ好きな子といっしょになりたいって、いっしょうけんめい、花の名前覚えて、花言葉だって勉強してたんだぜえ、柔道部のゴンちゃんが。それをさあ」

「んなこと言ったってな」

男子たちは他人の哀しみをネタに盛り上がり、小突きあいながら遠ざかっていく。

ヒマなギャラリーたちがいなくなったあとの、フェンスの外側のスーツ姿の若い男を陸上部の女子部員が目ざとく見つけた。おざなりな整理体操をしながら、ちらちらと気にしている。

ひろが、あれっ？ と小首をかたむけて体操を切り上げ、走ってくる。

「桧山さん！？」

「社長から迎えを頼まれたんだ。あとどのくらい待てばいい？」

「あ、練習はもう終わったの！ すぐ着替えてきます！」

言いながらポニーテールを揺らして走って行ってしまう。  
（いまどきのガキどもは……どこ見てるんだ。あれはいい足してるんじゃない、いい体してるって  
いうんだ。……腹筋も背筋もそうとう鍛えてあるな……いっぺん、脱がしてみたいな……）

さすが親戚どうしというべきか、ひろの反応は社長と同じだった。  
「このワンボックス？ わたしはぜんぜん気にならないわよ。いいじゃない、わかりやすいし、ガソ  
リンだって会社もちでしょ？」  
（なんにも気にならないやつなんだな……気楽でいいよな……）  
「まっすぐウチへ送ってけばいいのか？」  
「あ、倉沢モータースに寄ってって！」  
「なにそれ？」  
「会社の車のメンテナンスやってもらってるとこよ。東桜木三丁目のT字路、湖岸公園と反対へ曲  
がって左側の……」  
「……あとでもう一回言ってくれ」  
「うん。そこにね、自転車のパンク修理、頼んであるの。そこでおろしてくれればあと自転車で帰る  
わ」  
「はいはい」  
「お待たせしちゃいけないと思って、シャワー浴びないできちゃったの、汗臭いわよね。ごめんなさい」  
「育ち盛りの女の子が部活やってりゃ、しょうがないだろ。オレはべつに気にしないよ」

女なんてどれもおんなじだ、と桧山は冷めた気分で考えていた。  
彼の顔立ちと体つきはどことなく日本人ばなれしていて、見る者の目には黒い髪と黒い瞳がか  
えってエキゾチックに映った。その切れの長いきつい目は、向けた相手をよくたじろがせたが、同  
年代の女の子たちの胸をひそかにときめかせてもいた。  
ありていに言って、大学生の桧山はその気になれば身がもたないほど、もてたのだった。ただそ  
んな気になれないだけのことだった。  
汗で顔を光らせ、リンスやフレグランスのきつい香りをふりまいて声高におしゃべりに興じる異性  
たちは自分と同じ人間とは思えないくらい、違う生き物のように猛々しくて、近寄らせる気も起きな  
かったのだ。  
女の子なんてどれもおんなじだ、あの妖精に比べれば、と彼は思うのだった。

この小さな地方都市は、元々、湖のほとりに古くからあった温泉町で、行政と商工会は湖を中心にした観光地化に力を入れていた。湖周辺は公園と遊歩道にきれいに整備され、そこそこの規模の温泉ホテルがいくつか立ち並んでいる。

桧山が通う大学もあって、地方の小都市のわりに観光客と学生の出入りの活発な、活気のある町で、新城不動産の繁盛もうなずけるというものだった。

湖には夏の間、観光客向けにボートと遊覧船が出ている。湖の中央に何が祀られているのか小さな社(やしろ)を設けた小島があり、遊覧船はそこを一周して戻ってくる。夏の終わりの社の神事と祭りは観光呼び物の目玉になっていたが、その頃はいつも帰郷している桧山には縁のないものだった。

.....今年も同じパターンかな、と遊覧船乗り場を通り過ぎながら考える。

車内はエアコンが動いていても、ひろが乗り込んでからは、たしかにむせ返るようだった。次の帰郷でぜったいポルシェに試乗してやるとこっそり決心する。911カレラ。トランスミッションは8速DCT、3000cc水平対向6気筒ターボエンジン、背中に吸いつく(らしい)レザーシート、色は青い花という意味の濃紺。躍動感を秘めたクールな外観はまさに桧山 健のためにある！ と彼は思っていた。

まあ、試乗と夢想はいくらやっても無料(ただ)だから。

次第に雨雲がかかってきて、太陽を遮った。今しがたまでの好天がうそのようにあたりが暗くなり、雨粒が落ちてきた。

「あ.....雨」ひろがつぶやいた。

フロントガラスに大きな雨粒が落ちる。

冷たい雨の降る夕方、ひとつ傘の下で身を寄せ合って歩いたのは.....

まだ夏の制服を着ていたから九月も終わりごろのことだったはずだ。

下級生の女の子に触れないように気をつけていたが、それでも相手の体温を感じるほど近くにいた。

暗い灰色に閉ざされた世界の中で彼を温めてくれた、ただひとつのぬくもりだった。

冷たい雨だった。

他人のぬくもりを心底いとおしく思ったのはその時が初めてだった。

そのぬくもりを確かめたい衝動を必死でおさえようと、傘にあたる雨音に気持ちをそらしていた……だが、奈々子は「そのうちです」と終点を告げた。

……奈々子！

ふいに視界が歪み、何かがこみあげてきた。急ハンドルを切って湖岸公園の駐車場に車を入れて止め、からだをぶつけるようにしてドアをあける。

「ど、どうしたの！？ 具合が悪いの！？」

「なんでもない！！ ついてくるな！！」

車をおりよとするひろをどなりつける。

ひろが驚いたのは彼の剣幕ではなく、涙だった。

遊歩道の木を模した柵に手をついて、桧山は声を立てずに嗚咽した。生暖かい大粒の雨が髪を濡らし、シャツを濡らす。

奈々子の思い出が溢れかえり、細かい様々なことが甦ってくるのを止められない。

奈々子の怒った顔、泣き出しそうな顔、ふくれた顔、すねた顔……どんな表情もあざやかに甦ってきて、桧山は自分の記憶力に驚いた。

言動が目立つわけでも、目鼻だちが派手なわけでもない、どちらかと言えば地味な部類に入るのだろう。だが不思議と見るものの心をとらえる少女だった。

この少女の中、奥深いところになにがあるのか知りたい、確かめたい。

この手で……。

十七歳だった彼は幾度そんな燃えるような衝動にかられたことだろう。

積み重ねた時間はその思いを告げるには少なすぎ、告げる機会は、永遠に失われた。

早く忘れなければ、と自分に言い聞かせ、そうしてきたつもりだった。

だが本当に過ぎた思い出を忘れ去り、未来へふみだそうという気があるなら、彼はとうに日本を離れていたはずだった。

日本国内の大学に合格したのをいいことに、死んでしまった少女の思い出の残る国で暮らしている桧山だったのだ。

仕事にしろ、生活にしろ、……恋人にしろ、彼の未来はこの土地にはないとわかっていながら。

背後から傘をさしかけられて桧山はふと我に返った。ひろのことをすっかり忘れていた！

「……風邪、ひきますよ……」

「……ああ……」

ひろは胸に抱いていたスポーツタオルを差し出す。

「タオルはいつも二、三本持ってるの。これは使ってないきれいなものだから……」

「……ありがとう、使わせてもらうよ」

水場でネクタイをはずしてパンツのポケットに押し込み、顔を洗った。

使いこまれ、洗濯を繰り返されたらしいタオルは幾分硬かったが、水気をかたんに吸い取ってくれた。

雫が落ちてくるほど髪が濡れていた。両手の指を髪に突っ込んでかきあげ、頭を振って水気を払い、額を風にさらすといくらか気分がすっきりした。

雨はもうあがり、切れ切れの雲の塊の向こうに夕暮れのぼら色の空が見えていた。

ひろは細かなことにこだわらない、気安い女の子だったが、それでも他人の前で涙をみせてしまったのは気まずかった。

「……さっき、わかった。どなったりして……」

向こうをむいて湖をみているひろの傘がときどきくると回っている。

「うん」

振り向いたひろは笑顔を見せ、傘を閉じた。傘はひろの目から楡山の悲しみをさえぎってくれていた。

## 020.

新城社長はふたりより早く帰ってきていた。立ったまま緑茶をすすり、わざと腕時計を見る。

「キミたち……ナニやってたの？」

「ナニって……べつに……なにも」

「わたしが夕日が見たいって無理言っつきあわせちゃったのよ。楡山さんはだから、いやいやわたしにつきあってただけ！」

「ふうん？」

と新城社長は楡山の生乾きの髪とシャツをじろじろと見、次に姪を見る。こっちは部活で走り回って緩んだポニーテールのままだ。

「夕日ねえ……ああ……そう……あのさ……楡山くんさ」

「はあ」

「未成年者を日没後まで連れまわすと理由の如何なく指名手配されるって市条例、知らないの？」

「し、知りません！ 本当ですか！？」

「ウソ。だけどさあ、ちつとも帰ってこないわ、就業時間中なのに電話には出ないわ、なにかあったかと思うじゃない！？ もう……気をつけてもらわないと困るよ！ ひろは大事なあずかりものなんだし！ ……ひろの自転車は？」

「あ」

「……まったく、ほんとに、キミはだね！ ……」

新城社長はぶちぶちと説教をはじめ、ひろは頭を冷やしに雨上がりの外へ出た。

(けっきょくお小言か、かわいそ。泣きっ面になんとか、ね……)

ふっと吐息がもれる。そんなことを口にだしては、とてもからかえないと思い、頭をふった。

いつもきつい目で冷やかにひろを見る桧山が背中を向けて肩を震わせていた。ようやく、声をかけても大丈夫そう、とひろが判断するまで、ゆうに二時間あまりも彼はそうしていたのだった。

彼の背後でひろがずっといっしょに涙を流していたことを、桧山は知らない。タオルを借りたとき、気まずさからひろの顔を見なかったのだ。

「ひろがずいぶんキミのことかばってたねえ」

「そうですか？」

「なんにも気にしてないみたいにみえるけど、気にかけてるってみせない子だから。十六にしては見上げた気の配りようだよ。さすがボクの姪！ キミがほれるのも無理はない！！」

「……べつにほれちゃいませんですけど」

「いーかね！！ あの子は大事なあずかりものなんだから！！ 連れまわす時とほれる時はまずボクにことわるよーに！！」

「……はあ……」

ひろは頭を冷やすつもりだったが、雨上がりの夜気は少し生暖かかった。帰ってお風呂に入ろうと思っ直し、マンションのエントランスを戻りかけた時だった。

なにか白っぽいものが目に入った。

立ち止まって、なんだろ、と振り返ると、マンションの敷地と通りを区切っているフェンスの向こう、街路樹の下に人が立っていて、ひろはその人と目が合ったのがわかった。

ほっそりとしたシルエットは女性の、少女のものだった。

こちらを見ているということはマンションの住人か大家に用事かもしれない、と思い、また降り出してきた雨を気にしながら、一応ていねいに声をかけてみる。

「このマンションにご用ですか？　そこ、濡れますよ」

少女の方へ何歩か行って見て、ひろはおかしな印象をおぼえた。

彼女は白っぽいコートを着ていたのだが、それは——遠めにはレインコートに見えた——近寄ってみると、ウールのダッフルコートだった。足元は膝まであるロングブーツ、どう見ても真冬の服装、クリスマスのイルミネーションが似合いそうだ。

ひろは思わずぞくっとした。少女が立っているのは、モミの木の下ではなく、ヤナギの木の下だった。

## 021.

生暖かい雨の中、ぞくぞくと寒気をおぼえながらひろは思わずたずねた。

「あなた、だれ？」ほとんど詰問するようなきつい口調になってくる。「そこでなにしてるの！？」

桧山がマンションから出てきて外にいるひろに気づいた。

「なにやってんの、そんなところで」

「あ……あの……」

と、ひろは少女を指差す。彼は指差された方へ目をやったが、いぶかしそうに聞き返した。

「……なに？」

「……そこに……子猫が……」

「子猫？　捨て猫か？　ここ、ペットはNG。懐かれるとこまるぞ。ほっときなよ、かわいそうだけど」

「うん……」

そっと柳の木の下をうかがうと、少女が桧山をみているのがわかった。

「社長のお話は終わったの？」

「ああ、こってりしぼられた！　ま、しょうがないよ、ぼーっとしてたオレが悪い。……まだその辺にいるのか？　その子猫」

少女の繊細な造りの横顔をみながらひろはそっと首を横に振った。

「……ううん。いなくなっちゃったみたい」

「オレ、ちょっと駐車場へ行ってくる。車の中に携帯置いてきちゃったらしい。ほんとにぼーっとして  
るよな」

「気をつけてね」

そう言うひろに、桧山は唇の端をぎゅっとつりあげて笑った。

「それ、皮肉？」

言葉を返そうとするひろに片手をあげて行ってしまふ。

少女が桧山を見ているのが気になったが、その場を動く様子はなさそうだった。

ひろがエントランスを入ると、管理人事務所兼新城不動産のオフィスからは社長の笑い声が漏れ  
れきこえてきた。電話か住人か、誰かと話しこんでいるのだろう。

ひろはなんとなくほっとして、エレベーターに乗り、六階の自分の部屋へ戻った。

通りに面した窓を開けてみると、少女はまださっきの場所にいた。捨てられて雨に濡れている子  
猫のように心もとない風情に、ひろは思わずそっと声をかけた。

「そこは濡れるわ」

少女はふわっと面をあげ、ひろを見た。と、そのとたん、ひろは背後になにかの気配を感じて振  
り返った。

つい今しがたまで柳の木の下にいたはずの少女がそこに立っていた。

脱いだダッフルコートを両手で抱え、冬物のセーターとミニスカートの姿だった。ブーツは玄関に  
きちんと揃えられていた。

ひろは飛び上がった心臓をなだめながら笑顔をつくって言った。

「いらっしゃい」

少女はちょっと首を傾けて見せた。

どうぞ、とひろが部屋の真ん中に置かれた小さなテーブルを示すと、少女は玄関に近い方、下  
座を選んで素直に座った。立ち居振る舞いのひとつひとつがとても自然で、身についた育ちのよ  
さを感じさせた。

「あまり驚かないのね」と少女は初めて口を聞いた。子供っぽいというのではないが、えもいわれ  
ぬ、かわいらしい声だった。

「そうでもないけど」

ひろはちょっと笑ってみせ、キッチンに立ってコーヒーマーカーをセットする。

来客用に一客ぶんどけとってあるカップとソーサーをトレイにのせ、テーブルに戻って少女の前  
においた。

セーターの襟元にあごを埋めるようにしていた少女は顔をあげてひろを見た。

「……わたしに？ あの、わたし……」

ひろはにっこりと笑った。

「うん。せっかく来てくれたんだもの。私の気持ちよ」

## 022.

「……いい香り」少女はすうっと息を吸い込んだ。コーヒーメーカーがこぼこぼと軽い音をたてている。

「匂い、わかるの？」

こっくりとうなずいて

「ええ……でもたぶん、好きな匂いだけ。コーヒー、花、ひのき……」

ひろはちょっと背筋を伸ばしてから少女の顔を覗き込んだ。

「あなたのなまえ、聞いてもいい？」

「……わたしのなまえ？」

少女は不思議そうに聞き返した。

黒目がちの目でみられて、ひろはなんとなくどぎまぎした。まじかで見ただけの少女は陶器のようになめらかで肌理のこまかい頬をしていた。目鼻だちは人形のように繊細だった。

大型テレビや映画館の大スクリーンにアップで映されて鑑賞に耐えられるとすればこんな顔かしら、と妙なことを考える。グラウンドを走ったままシャワーも浴びてない自分がいかにもがさつに思えて、テーブルの上に乗り出しかけたからだを引いた。コーヒーメーカーのこぼこぼ音が聞こえなくなると、ひろは立ち上がった。

「……わたしのなまえ……」

少女が小声で繰り返した時だった。玄関のチャイムがなった。

コーヒーのポットを手にしたまま、ひろが応対に出ると、来客は桧山だった。

ほら、とバッグを差し出す。ひろは「ああっ！」と大声をあげた。部活で使って着替えたユニフォームとアンダーウェアを突っ込んだバッグ！

「車に置き忘れてたのね！？」大慌てで受け取る。

「中、見なかったでしょうね！？」

「見るわけないだろ！！ 届けてやったのになんだよ、それ」

「ご、ごめんなさい！ どうぞ！ 入って！ 今コーヒー淹れたとこなの！」

バッグを足元に置き、ひろは桧山のシャツをつかんで部屋の中へ引っ張り込もうとした。彼のそばへ近寄った時、なんだかいい匂いがする、と思った。

(針葉樹の香り？)

少女がさっきなにか言ってなかったっけ？ ひのきの匂いが好きだとか……

ひろは思わず桧山から手を放した。

「なにをするんだよ」

つかまれつきはなされ、桧山は不愉快そうに言った。

「ごめんなさいごめんなさい！ いっしょにお茶しませんか！？」

ひろはあたふたと口走った。

こいつなにをあわててるんだと思いながら、桧山は部屋の中に目をやった。誰もいないテーブルに、まだからっぽのカップのセットがのっている。桧山がくる前からそこに置かれていたものだ。

「これから誰かくるんだろ？」

「えっ？ あっ。そ、それはわたしのよ！ かわいいでしょ！ お気に入りなの！」

ひろはあたふたしながら目を走らせた。少女はテーブルの前にはず、壁の前に立っていた。壁には時計がかかっていた。

桧山にはひろが時計を気にしたように見えた。

会社の車の中に置きっぱなしだったひろのバッグを届けにきたのはいいが、場違いなところへ来合わせてしまった、と彼は思った。

時計はもう午後九時を回っている。こんな時間の来客が女の子のわけがない。きっと男だ。同じマンションの中の住人かもしれないが、それにしても男だろう、と桧山は思い込んだ。

ここへ引っ越してきてから、あの社長のせいでもないのだろうが、なぜか調子が悪かった。歯車がかみ合っていない、なにかしら空転している、そんな感じだ。

今日は今日で、社長の姪っ娘に洗濯物の入ったバッグをのぞいてないか疑われる始末！

無性にむしゃくしゃして必要以上にきつい目でひろを見て言った。

「邪魔してわるかったな！」

「あ！ ひやま……」

ひろがびっくりして声を上げたときには、ドアは大きな音をたててしまっていた。

「な、なに？ なんなの？ 桧山さん、なんか誤解してない！？ ねえ！」

ひろはドアに向かってまくし立てたが防音が売り物のドアはひろの声を通さなかった。

桧山はいちど部屋に戻ろうとしたがふと気がかわって、外の空気に当たろうと一階へ降りた。そこで運わるく社長につかまった。住人のひとりがこの週末に引っ越すことになったので家賃の清算をしてほしいという。

「オレがやるんですか？ これから？」

入れ替えたばかりのコンピューター・システムに社長が手こずっているのを知りながら、わざと尋ねた。

「残業代五割増し、夕食代上乘せでどう？ 晩飯まだでしょ？」

ついてないのかついてるのかよくわからないが、少しは溜飲がさがるといったものだった。

023.

家賃の清算はすぐに済んだが、二十代後半の女退去人は桧山に興味を示してなかなか引き揚げようとしなかった。桧山が同じ建物に住んでいる大学生だと知って、心底退去を残念がり、引越ししなければならない理由を延々と語っていた。

先刻ひろの部屋へ忘れ物を届けたことがなんとなくひっかかった。

前にも……昔……同じことがあった。奈々子がやはりバッグを置き忘れ、彼は後を追ったのだった。

なぜ、同じようなことを繰り返すんだろう、と彼は女退去人の話に適当に相槌を打ちながらぼんやりと考えていた。

なぜ今になって、奈々子のことばかり思い起こすんだろう……。

(奈々子……)

\*

ひろは、あーあ、とため息をついてテーブルの前にすわった。

自分用と客用と、コーヒーを注ぎわける。「座らない？」

少女はおずおずと席についた。

「あなた、ひやまさんのこと、知ってるんじゃない？」

「ひやま……？」少女はげげんそうにつぶやいた。「あのひと、ひやまさん、ていうの？」

うん、とひろはうなずいた。

「あら、私のカン違いかな？ あなた、桧山さんに縁のある人で、それでここへ来たのかしらと思っちゃったんだけど？」

少女は顔をあげてひろを見て言った。

「あのひとのことは知ってるわ。でも……ひやま……って名前だったかしら？」

「？」

「よく……思い出せないの」

「……じゃ、あなたの名前は？」

「ななこ……って、あのひとが呼んだわ」

「ななこさん……あなた、生きてるひとじゃないわね？」

少女、ななこはうなずいた。

「車にはねられたみたいなの。目の前がまっしろに光って……死んじゃったのね、わたし。……あなたには」とななこはひろを見た。「わたしが見えるのね。ほかのひとには見えないみたいなの  
に、どうして？」

ひろはにっこりと微笑んだ。

「私の実家は神社でね、父は神官なの。ふつうの人には見えないものが見えちゃう、霊能者の家系なのよ。私の力なんて微々たるものだけど、たまに見えることはあるの。でも、あなたみたいにはっきり見えて、話をしたのは初めてだわ」父には、同情したり声をかけたりしてはいけない、と言われていた。

ひろのきらきらする目にみつめられて、ななこはあからさまにいやな顔をした。同性の好奇の目にじろじろ見られるのは昔からきらいだった。うれしいになってからもじろじろみられるなんて冗談じゃない、という顔だった。

その不機嫌そうな顔さえ、なんてかわいいんだろ！ とひろは内心おどろいていた。

それは桧山にもいえることで、彼のきつい目は持ち主をいつも不機嫌そうにみせていたが、ひろは不思議なほどいやだとは思わなかった。

それよりも、なにがそんなに悲しいのか、と思うのだ。彼の心の奥にはなにかしら云い難い悲しみが隠されている。彼は初夏の暖かい雨が降るなかでそれを露呈してしまったのだ。

そうだったのか……とひろは胸落ちする思いだった。

桧山の悲しみはこの少女を失ったことだったのだ……

ひろから目はずしながらななこはつぶやいた。

「そうだわ……じろじろ見られるのは昔からきらいだったの。——でも、それいつのことかしら」  
「あなたが生きてたころのことでしょ？ ねえ、ななこさん、あなたの家はどこ？ 生きてたころ、どこに住んでたの？」

ななこはそっと首を横にふった。

「——わからない。——なんにも思い出せない」

「記憶が……ないの？」

そんなのって、あり？ とひろはこっそり思った。記憶喪失のうれしい！？

ななこの顔に、にわかには困惑の表情を浮かびあがってきた。

「なんにも思い出せない——！ どうしよう！」

ゆうれいがなんにも思い出せなくてもべつに困ることはないんじゃない？ 死んじゃったんだし。と、ひろはまたこっそり思ったが、考えてみれば困るのはひろの方だった。

柳の木の下で桧山の後姿を見ている少女が、拾い手のない子猫のように哀れに思えて、つい部屋へ呼んでしまったが、桧山のところへ行くなり、自分の家へ帰るなりしてもらわなければ——「困るわ！」

## 024.

「ななこさん、あなたやっぱ家に帰るべきよ！」

「わたし、死んじゃったのよ。住所も思い出せない」

ひろは(うわー)と髪をかきむしった。「なにか覚えてることはないの!？」  
美少女のゆうれいはきっぱりと首をふった。

「なんにも。あのひやまさんてひとに呼ばれて来ちゃったんだと思うわ、『ななこ』って。それがきつとわたしの名前なのね」

ななこは立ち上がろうとした。

「どうしたの？ どこへ行くの？」

「ひやまさんのとこへ行ってみるわ」

「そ、それは……やめといた方がいいわよ！ だって……！」

こんな時間にいきなり……ななこの場合いきなり部屋の中へ……訪問するのはやめといた方がいい理由があれこれ脳裏をかすめた。シャワー中かもしれないとか、あるいは……しかしここはいちばん無難なのにしておこう。「……桧山さんにはあなたがみえないのよ！」

ななこは花がしおれるようにしゅんとなった。

「そうだったわ……」

ひろは次第にむかむかしてきた。

(桧山のやつ～！ 女の子呼びつけといて、ほったらかし？ それもこんなかわいい子！ 死んじゃった恋人かなんか知らないけど、いっしょになって泣くなんてわたしもどうかしてたわ！)

「わたし、どうしたらいいの？」ななこはすっかり途方にくれていた。

けっきょく、桧山の言ったとおりだった、とひろは思った。

かわいそうだ、というだけで面倒をみる準備も覚悟もない者に拾われた子猫は、やっかい者でしかない。ひろは自分のおせっかい気質に心底うんざりした。さらにやっかいなことに、この子猫はうれしいなのだ。

「あっ！」とひろは、思わず声をあげた。「おとうさんよ、うちのおとうさん！ 仕事から、こういうことには慣れてるはずだわ！ 怒られるかもしれないけど、相談してみるわ！ おとうさんならなんとかしてくれるわよ！」

「なんとかって？」

「だから——」

神官である父がそれをどう呼ぶのかひろは知らなかったが、つまり、死後にさまよっている魂を成仏させてくれるだろうということだ。勢い込んでそう言い、ななこの顔を見てはっとした。

「わたし……また死ぬの？」

「そ、そういうのと、違うとおもうけど」

「いやよ」

「——え」

「死にたくない、っていうんじゃないの。あのひと、ひやまさんがどうしてわたしを呼んだのか、それを知ってから死にたいの」

「——セリフだけ聞いているとロマンチックね～」

「茶化さないでよ」

「ごめんごめん。だけどさ、それって、彼があなたのこと好きでたまらなかったってことじゃない？」

「——そうかしら」

「そうかしら、って、あなたね。彼、あのとおりの背が高くってちょっとカッコよくて目がものすごくこわいけど、どっか抜けてるし泣き虫だし、見た目ほど憎めないのよね。中身はけっこう純なんだと思うわ」

「それ、ほめてるの？ けなしてるの？」

「どっちでもないわよ、そう見える、ってだけよ」

「あのひと、とっても複雑なひとよ。あのひとの魂は繊細なガラスでできてるの」

「そ、それはどうかしらね。ななこさん、あなたやっぱり桧山さんのことよく知ってるのね？」

「ええ、きっとよく知ってたんだわ。ううん——そうじゃない——そういうひとじゃないかなって」

「どうということ？」

「あたし——それを確かめたかった——」

「はあ……??」

「ねえ」とななこは手をだしてひろの手の甲にのせた。ひんやりした手がひろの生きた温かい手に重なった。

「ここにいさせてくれないかしら」

「わたしの部屋に？」

「面倒はかけないわ、食べ物も飲み物もいらないし。いさせてくれるだけでいいの。ひやまさんがどうしてわたしを呼んだのかわかったら、そうしたら——あなたのおとうさんをお願いするわ、成仏させてください、って」

「……」

\*

ひろが風呂からあがってくると、ななこはひろのベッドで寝息をたてていた。

(ふうん…….ゆうれいでも眠るんだ)

生暖かな初夏の宵、ななこは冬物のセーターのままで眠っていた。事故に遭った時この格好だったのだろうと、そう思うと、ひどく胸がいたんだ。

(記憶喪失のゆうれい、か。なんか、おかしなこと言ってたけど、かわいいし、かわいそうだし、ま、いっか)

ひろは想念の中でななこのミニスカートのすそを整え、毛布をかけてやった。寝顔に見とれながらベッドによりかかり、そのまま眠った。

## 025.

ふだんはトレーニングと称してもっぱら階段派のひろだったが、寝不足でぼんやりとエレベーターに乗ってしまい、桧山と鉢合わせしてしまった。

今朝は自分のベッドで目覚めた。カーテンの隙間からはいつもどおりの朝日が射しこんでいて部屋は光に満たされていた。美少女のゆうれいは見当たらず、昨夜のことは夢だったのかと考えていると、

「おまえ、目の下にくまができてるぞ」

「無神経な人ね！ ひとの顔みるなり！ あなたみたいなひとに彼女はもったいないわ！」

桧山はなぜかぎよっとしたようだった。

「——なんのことだ？」

「とぼけないでよ！ わたし知ってるんだから！」

「だから、なんのことだ？ ここのマンションには知り合いはいないし、住所は誰にも教えてない！」心なしか青ざめた顔で口走った。

「どうだか！ 自分で彼女呼んだくせに！」

楡山は低い声ですごんだ。「——あんな——、オレ低血圧で朝は機嫌悪いんだよ」

「だ、だからなによ？」

「妙な言いがかりつけると——」

「な、何する気？ ——きゃあ！！」

「『きゃあ！！』はないでしょ、『きゃあ！！』は」

「あ、社長」

「朝っぱらからエレベーターの密室でなにをいちゃついているのかね、きみたち」

「聞いてよ、おじさん！ 楡山さんたらね——！」

終わりまでいわず、楡山はひろの腕をつかんでエレベーターを降り、一階のホールを突っ切った。後ろから新城社長の声が追いかけてくる。

「あれ、楡山くん、きみが行ってくれるの？」

「——は？」

「ひろの学校までだよ。ボクが送ってくつもりだったんだけど、あ、そう、そういうこと？」

「え！」

「そ、そんな！ おじさん！」

「いいんだいいんだ、ひろちゃん、感謝なんて。楡山くん、入社少しくらい遅刻してもいいよ。ああ、なんてさわやかな朝だろう！」

新城社長は明るくハミングしながら事務所に入ってしまった。

『新城不動産』のおしゃれなロゴの入った営業用ワンボックスカーのドアをふたりはしぶしぶ両側から開けた。

ひろの通学用自転車は修理は済んでいるはずだが、楡山が受け取りにいくのを忘れてしまったのだ。自業自得のようなものだ。

ドアを締め切るとふっとかすかな香りが立ち込めた。

桧山から漂ってくる針葉樹の香りには昨夜初めて気がついたが、なぜかくらっと目眩のようなものを覚えた。それはひどくなつかしい、幼時のころの幸せな記憶がよみがえってくる感覚だった。実家が杉の古木に囲まれたいたせいかもしれないわ、とひろは思った。

## 026.

ひろは思わずも涙がこみ上げてきた。

彼女の実家は山あい深くにあって——高校へ通うのに新城家の世話になっているのはそのせいであった——泣きたいほど懐かしく心に残るような思い出が幼児期にあるのかというと、そうでもない、と思う。

神社という、磁場が普通ではない場所はいろいろなことが起こる。常人がなんとなくぞくぞくする涼感を覚えているような時は、ひろのような人間はその人の背後に涼感の原因を見たりする。わりあい頻繁に出くわすそれは幼児にとって楽しいといえる記憶ではなかった。できることならこういう環境から早いところおさらばして陽の当たるにぎやかな場所で明るく楽しく暮らしたいと思いつつ、高校進学でその願いがかなった時は、神さまに拍手(かしわで)を打って感謝したものだ。

だが明るく楽しい高校生活は一年だけだったかもしれない、と思い始めていた。

自分だけの趣味で塗り固めたマンションの彼女の部屋には昨夜から美少女のゆうれいが同居しているし、となりの運転席にいる気難しくてつきあいくい大学生は引っ越してきたばかりで、あと一年か二年、ひろの高校在学中は居座るだろう。

明るく楽しいタウン・ライフはもう戻ってこないかもしれない、そんなことを考えているとなんだか情けなくなって、涙腺が刺激された。

桧山が赤信号で停車すると歩道を歩いている通行人と目があつた。通行人は可燃ゴミのはちきれそうな袋を両手に持ったエプロン姿の主婦だった。主婦の目は運転席と助手席を幾度か往復し、そそくさと足早に通り過ぎて行った。

その時になってようやく桧山はひろがハンカチで目を押さえているのに気がついた。主婦が遠慮もなくじろじろと眺めていったわけだ！

「なに——どうしたんだよ！？」

ひろは涙をすすりあげながら、くぐもった声で言った。

「な、なんでもないわよ！」

「なんでもないって——」

信号がかわって、新城不動産の営業車は後方からクラクションで発進を促された。朝の通勤時間はみな一分一秒を争って殺気立っているのだ。楡山はバックミラーで後ろの車のドライバーを思い切りにらんで、わざとゆっくりと車を出した。

気がつくとき昨日の帰りに寄り道した湖岸公園の近くだった。対向車線に連なるようにしていた数台の大型コンテナが通り過ぎると、道路反対側の「公園駐車場」の表示が目に入った。

ひろはなかなか泣き止まず、楡山は内心(あ～あ)とため息をついた。

傍から見れば、どうしたって彼が同乗の女の子を泣かせているようにみえるはずで、地元ではそこそこの知れた不動産会社の名の入った車に乗っているときに、ちょっとまずい状況ではあった。

わけのわからない泣き方をされるのは彼としても不本意であり、そこで、(とりあえず誤解の芽を摘んでおこう)、と思ったのだ。過去に何度となく女の子を泣かしてきたものだが、誤解を放っておくと、たいてい面倒なことになるのだった。

開けた窓から水と草の匂いが入ってくる。アルバイトも高校も遅刻は確実だったが、ため息をつきたい気分を抑えて彼はできるだけ静かに言った。

「——話してみろよ」

ひろは顔をあげて運転席の楡山を見た。ひろに横顔を向けたまま、彼は窓の外を見ていた。

「——話す？」

「オレ、おまえに何かしたっけ？」

ひろはちょっと考えて頭を振った。

「ううん」

「なんだ、やっぱりオレのせいじゃないのか」

どうして泣いちゃったんだろ、とひろは考えた。すると泣きたい衝動がふっと離れていった。きっかけは、この針葉樹のような彼の匂いだったと思い出した。

実家の父がひのきチップ入りの枕を愛用していたが、そうだわ、あれと似ている、とひろは思った。これはひのきの香りだったのだ。

この香りにいつまでも浸っていたい、この香りの中で眠りたい、と突拍子もないことが心をかすめて、思わず心臓がどきん、と高鳴った。そして反射的に口走った。

「あああああ、あのっ！ あたし、がっこういきます！」

そんなひろを落ち着いた黒い目が見ている。

「——そうか？ 何か悩み事があるなら聞いてやるぞ」

その落ち着きようは、かえってひろをどぎまぎさせた。大学三年目の彼は、21歳で成人した大人、その考えはひろの心の揺らぎをさらに煽るものだった。

「ああああありありありありがとう！ それじゃ！」

助手席のドアを開けて外へすべり出た。なぜか一刻も早く逃げ出したかった。

「学校へ行くなら、送ってってやる」

「ああああ、いいいえ！ 自転車受け取って、それで行くから！ だいじょうぶよ！」

「ああ、なんとかいう修理工場、ここから近いのか？」

「え、ええええ、すぐそこ」

「——そう？」

楡山はすっかり落ち着きを取り戻していた。ひろはますますどきどきする。

「ひ、ひとりで行けるから、心配しないで」

「——ああ。わかった。——じゃあ、気をつけて行けよ」

「は、はい。あの……、送ってくれて、ありがとう」

「——きのう、付き合ってもらったから、な」

片方の唇の端をぎゅっとつりあげ、楡山はエンジンをかけた。

## 027.

「へっへっへっへっへ」

「きゃあっ！ 妖怪！」

「誰が妖怪だ！」

「あれ、あなたは『かわい亭』のマスター！？ お、おはようございます！」

「よ。まいど。えへへへ、見たぜひろちゃん、朝からやるねえ！！」

「なななんのことでですか？」

「いやいや、朝もや流れる湖の岸辺で……あー、やめとこう、なにごとにもヤボはいけねえやな。

さっきのしっぽりしたきぬぎぬの場面はおじさんの心の奥底にこう、そおっ、としまっというやるからな、まちがってもせがれにしゃべったりしねえから安心しな。おっと、学校行く途中だったな、引き止めてわかった！ じゃな、またごひいきに～！！」

ひろが「え」とか「あ」とか「ちょっと」と口ごもっている間に、声をかけてきた中年の男はひとりでしゃべってスクーターを走らせて行ってしまった。

湖岸通三丁目のお好み焼き屋『かわい亭』のマスターで、河合という。そのせがれはひろの高校の同学年同クラス、陸上部のマネージャーをやっている河合だ。マネージャーの自宅のお好み焼き屋は陸上部員の行きつけでもあってひろも常連のひとりだ。

ひろは頭を抱え込みたかった。朝から日差しが強くて目に痛い。いっそ桧山に車で送ってもらえばよかったかなと思うが、人目の多いところでふたりいっしょのところを見られればあることないこと噂になるのは必至だった。ふだんのひろなら、どうでもいい他人の口などまるで気にしないのだが、今朝は気にしないわけにいかなかった。新城社長といい、『かわい亭』の河合マスターといい、どうにでもひろと桧山をくっつけたいらしかった。

「なんなのよ、いったいぜんたい。なんでわたしがあのひとと」

ぶつぶつと独り言をいいながら自転車を預けてある修理工場までとぼとぼ歩き、入社したばかりの工場の従業員が寝ぼけまなこで奥から修理物件を出してくるのをおとなしく待っていた。通学用リュックがやけに重たく感じる。従業員がなかなか戻ってこないの、ひろはリュックを肩から下ろして、何が重いんだっけ、と中をのぞいてみた。重量の犯人は国語辞典だった。携帯型電子辞書がなかった時代は、勉強熱心な若者はこのように重い重い辞書を持ち歩いたのである。ふだんは学校におきっぱなしにしているが先週末に作文の宿題があつてうちへ持って帰ったのだった。

「辞書なんておじさんとこの会社のパソコン借りればすむのにさ、なに考えてたんだろ、わたし」ぶつぶついいながらばらばらとめくってみる。

そういえばさっき会った河合マスターがなにか聞きなれない言葉を言っていた、と思い出した。『きぬぎぬ』とかなんとか。なんのことかしらと時間をもてあまして『カ』行を繰ってみた。

工場の奥から自転車を押して戻ってきた従業員は、開いた国語辞典ごしに引きつった顔を赤くしている女子高生を発見したのだった。

## 028.

河合マネージャーはスポーツとは縁のなさそうな、ひょろりとしたからだつきの男子生徒だ。本人にいわせると、間宮 ひろの走りに感動して陸上部のマネージャーになったのだというが、周囲の人間は感動したのは、間宮の“走り、”というより顔とボディ、それもピンポイントに胸だろうと見解が一致していた。

お調子者で口が軽くて抜け目のない河合マネージャーに「走りに感動した」というメンタルな台詞はどうにも似合わなかった。

先日も新学期早々のホームルームで居眠りした河合は夢の中でその思いのたけを、誰もいない校舎の屋上で夕日を背に、ひろ本人にドラマチックにささやいたつもりだった。

「おっ……おれは、おれは間宮がすきなんだ……！」

ささやいたつもりだったのだが、新学期で普段よりは緊張感のあるホームルームの教室に河合の寝言はドラマチックにもはっきりと流れてしまった。

間宮 ひろのコメントは「いつもあたしの胸しかみてないくせに」だった。

『かわい亭』のマスターは立派なお好み焼き職人だったが、せがれの方はお調子者で口が軽くてそれなりに愛嬌があっても、時々目が三日月形になっていやらしー、とひろは常々思っていた。だがマネージャーの仕事は意外なほどしっかりこなしていて、それは商売人の家庭に育ったせいなのだろう。

とにかく、三日月型の目で胸しか見てこない河合に告白されても、ひろとしては無視するしかなかった。ほとんど話したこともない権田の熱烈な愛の表明の方がよほど困った。『ごめんね』は、ひろの精一杯の誠意である。権田にはわるいがもらった赤いバラは、昼間は無人の部屋でとうに萎れてしまった。

——桧山さんの無愛想さやとっつきのあるさもほめられたもんじゃないけど、それでも河合よか、ましよ。河合はへらへらしてて軽くてなんだか中学生みたいだけど、その点、桧山さんは落ち着いててオトナだもん、と考えてひろはまた思わず赤くなった。十五、六の高校生と二十一歳の大学生では、人格的成熟度の差は大きかった。

河合マネージャーと天秤にかけても、桧山健はずっと大人だったが、権田のてらいのない性格は桧山のわかりにくさよりよほど愛すべきものだった。

(あたしったら、なんだっていちいち桧山さんをひっぱりだすのかしら)

その桧山との朝の別れを河合の父親に目撃されてしまったのは、はたして吉なのか、凶だったか。

河合の父親はなにやら勘違いしたようだったが、見られちゃったものは、しょうがないじゃない！とどこかの政治家の暴言よろしくひろは開き直った。

——はっきりいって河合くんにはあんまし興味もてないけど、桧山さんはカゲがあってももしろそうだわ。ななこさんも言ってたじゃない、彼の魂は繊細なガラスでできてるって。

それはそれで疑わしい見解だったが、とにかく、ひろが心を乱す原因を持ち込んだのは、ななこにはちがいがなかった。

——彼女をなんとかしなくっちゃ。

今日は部活、さぼっちゃお、とひろは決心した。ひろの所属する陸上部は春先から故障者続出で練習にやる気をもやす部員はほとんどいなかった。

——マネージャーは怒るだろうけど、今日はあんまり顔あわせたくない気分だし、さぼっちゃお。はやく帰って、彼女と話さなくちゃ。

## 029.

ななこは飲み物も食べ物もいらなうと言っていたが、なんにもないのも、ちょっとね……、と考えたひろは、学校帰りに花屋に立ち寄った。

新城マンション一階の花屋は『フラワーショップ・ゴン』という、まあ、なんともいえない名称だが、権田生花店の支店だからしょうがない。事業主の息子のトオルは、店の売上＝花材調達要員として高校華道部に籍を置いているうえに、本命は柔道部で、今のところ家業を手伝うヒマはない。というわけで、トオルが新城マンションを……告白以外に……訪れる可能性はまず、なかった。

さて、あの少女はどんな花がすきだろうかと店内を見渡し、白菊とトルコ桔梗を束ねた仏花のお買い得セットにふらっと揺れる心を立て直した。

(まちがっちゃいないけどさ、あんまりよね)

マンションの管理人事務所にはなおみ専務しかいなかった。

「早かったわね、いただきもののお菓子があるのよ、お茶にしましょう」

なおみ専務はひろをみるといそいそと立ち上がった。うん、とうなずきながら、ひろはもちがさりのする花の包みを置く場所をさがした。

「あら、かすみ草？ ずいぶんたくさんね」

「う……ん、ちょっとね、飾っちゃおかなと思って」

「ひろちゃんが？ 自分の部屋に？」

「うん。へんかな、これ」

「そんなことはないけど」

なおみ専務はなんとなく頬をゆるませながら言った。

「そうか、お客さんね？」

「え」

「なんかうきうきしながら早く帰ってきたじゃない？ それもお花なんか抱えて」

「え、えーと、そ、そう、お客さんなのよ」

「ふうん？」

ひろが部屋に戻って花の包みを解いていると、桧山がやって来た。「専務に頼まれた」と言っ  
て。

「あっ！」

廊下には大きなダンボール箱を載せた台車があった。桧山の顔をみれば、喜んで頼まれてきた  
わけではなさそうだ。

「ごっ、ごめんなさいっ！！」

「いいよべつに」淡々と言いながら台車の向きを変えにかかる。

「そこ、どいて」

「あ、はい」

いっぱいに開いたドアから玄関に台車が入り、大きな箱は上がり口に引き降ろされた。桧山の  
機嫌のわるさは見え見えで、ひろは声もかけられない。

(わたしまた怒らせちゃったのかしら。なおみおばさんたら、桧山さんになんて言ったんだろ)

「手伝ってやろうか、模様替え」

「え？ い、いえ！ 自分でやりますから！ ほんと！ それよりその台車、私が下まで——」

「いや、いい。おまえ、お客さんがくるから忙しいんだろ？」

「え、ちょっと、ひ——」

言いかけるひろの鼻先でドアが閉まった。

ひろは泣きたい思いで桧山が運んできた箱のふたを開けてみた。

中身はクリーニングされたカーテン一揃いと、同じ柄のベッドカバーとピローカバー。新城不動産のモデルルームの春先の模様替えで引っ込めた、先シーズンのファブリック式だった。クリーニングからあがってきて事務所の隅に置かれていたのを、譲ってくれないかと、ひろはなおみ専務にねだった。

それは淡いグレー単色の地にペイズリーが立体的に織り込まれたクラシックな柄で、ピローカバーだけは青みの強いラベンダー色。かなり高価なもので、取引先のインテリアショップで売れずに残っていたのを卸値で回してもらったのだった。ちなみに、物件自体はすぐに買い手が見ついた。

専務は思わず「ひろちゃんに？」と聞き返した。

「だめ？」

「えーとねえ、桧山くんもそれ、欲しがってたのよ」

「——」

ひろの沈黙を落胆と受け取ったなおみはあわてて言った。

「桧山くん帰ってきたら聞いてみるわ、ね？ 日焼けしちゃってるし、うちではもう使い道のないものだし、誰に引き取ってもらったって、会社はぜんぜんかまわないんだから」

なおみ専務はただ、ひろがそのファブリックを気に入ったようだ、と言ったのだが、普段明るいきっぱりした色使いを好む高校生が気に入るには、どうにも、違和感があった。

ひろの気をひいたのは勾玉のような渦巻きのような、植物のようにも見えるその図柄で、なぜかななこに似合う気がしたからなのだが、なおみも桧山もそんなこととは知るよしもない。

「こう言ったらなんだけど、ひろちゃんにはちょっと似合わないわよねえ」

「自分の趣味じゃあ、ないんじゃないですか？」

そこでなおみと桧山は顔を見合わせ、それぞれの胸中に(男?)の文字が浮かび、どちらからともなくため息まじりに「しょうがないですね」ということになったのだった。

### 030.

間宮ひろに彼氏がいようが、部屋に呼ぼうが、そんなことは自分とは関係ない、とはわかっている。

なのに、ひろのこととなると、なぜこうもむしゃくしゃするのか、桧山にはさっぱりわからない。五歳も年下の高校生を冷たい目を見て、わざとのように きつくあたっている自分はいったい何をやっているんだろう……

もしかしたら……とふと思いが当たったことに、彼はさすがにうんざりした。  
(オレは間宮ひろの相手の男に嫉妬してるのか?)

うんざりもうんざり、あまりにもバカバカしくて、彼はエレベーターの中で台車の縁を靴の裏で思い切り蹴った。

(なんであいつを目のまえにすると——)

(——なんていうんだろうな——)

どうしてもいじめたくなる。

自分が自分でなくなってしまう、そんな気がするのだった。

だまってそこに立っていても通りすがりの人間の目を引き、振り向かせる、西ノ宮奈々子のような美貌も気品もない。

なんの変哲もない、はっきりいって平凡な娘だ、それなのになんでこうも気になるのかと考えて台車の縁を踏みにじった。

この間からまったくどうかしている、と桧山は思った。いつのまにか奈々子とひろをワンセットのように考え、ひろに冷たくあたり、彼女の仮想の彼氏に嫉妬を覚えはじめているとは！

こんな不毛で理不尽でわけのわからないことをしていたら——ここでの生活はいずれ破綻するだろう。

妙に投げやりな気分で台車の縁から足を下ろした。

大学はまだ二年近くあるが、切り上げてしまおうか。

なにもかも投げ捨て、放り出して故郷へ帰りたい。

それは狂おしい望郷の念ではなく、目の前の現実を破り捨ててその中に倒れこみ眠ってしまいたい、自暴自棄の甘酸っぱい誘惑だった。

1・「僕たちは前世から赤い糸でつながっている」

2・「あんたなんか、だいたい嫌い！」へ続く

## あとがき

2020年12月公開の『nanako-fifteen』から直接続く話です。四年かかってようやく続きを公開する運びとなりました。

悩んだのがタイトルでして、さて、主人公は誰だ。ひろちゃんか、桧山くんか。いやいや…これはななこの話だよなー、というわけで、もう『nanako-fifteen』の続き(なので、ナンバーリングは17からです)、タイトルもそのままにして、IIをくっつけました。

『Salamander in the circle』の長〜い話を通して読んでくださった読者さまには、『僕たちは前世から赤い糸でつながっている』というゴンちゃん的主張、わかっていたかと思います。誰と誰が、ということは置いといて、この世で巡りあってしまったからには深い因縁があるというわけですね。

表紙。そのたび悩むし時間とられるものなのですが、今回は現代の話なので、ひとつやってみようかと思い立ち、AIで作画してみた。けっこうイメージ通りで短時間で済み、筆者はどれも気に入っていますが、いかがでしょうか。おっと、まだ第一章だった。

いったんは書き上げてあったもので、前の二作品を受けていくらか書き直し、五つの章に渡っていますがほぼいっぺんにUPできそうです。

2025年1月13日 記

## 奥付

nanako-fifteen II

1・僕たちは前世から赤い糸でつながっている

2025年 1月20日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「[Designer](#)」

「[NEO HIMEISM](#)」

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社